

総合科学技術会議 重点分野推進戦略専門調査会
フロンティアプロジェクト第3回会合議事録

(7/6 に一部改定)

日 時 平成13年5月17日(木) 午後1時～3時30分

場 所 物産ビル別館8階 委員会会議室

出席者(敬称略)石井紫郎、井村裕夫、小平桂一、馬場錬成、植田剛夫、木下肇、河野通方、
五代富文、平啓介、田中彰一、谷口一郎、西尾文彦、西田篤弘、野中ともよ、
毛利衛

(石井) (開会あいさつ) 議論も尽きないのに官僚の作文で片づけるのは困るという御意見を頂戴している。資料は用意させていただいたが、問題点等どんどん議論を深めていただきたい。

5月23日に本プロジェクトの親組織である重点分野推進戦略専門調査会が開催され、その様子を24日に開催される総合科学技術会議の本会議で報告をする予定である。本日の資料1はその報告に向けての資料として準備させていただいた。他の分野との横並びで書式が決まっているので、議論の素材としてそれを前提に文字を書き込ませていただいた。本日はそのようなスケジュールと、書式に整えたものを準備しないと行けないことを念頭において、ご議論を発展させていただきたい。なお、23日の専門調査会での報告が最終的なものではない。

【事務局から資料1～3の説明】

事務局注：資料2は資料1の書き下し。以下現状での訂正点

- p.1 「利用系から見て、国民が夢を持って期待できる」 「国民が夢と期待を抱ける」
p.2 「大きなプロジェクトを適正に評価し、必要に応じた措置を講じることが挙げられる。」
「大きなプロジェクトを厳正に評価し、適正な措置を講じることが挙げられる。」

(石井) 資料1の「推進にあたっての基本的事項」を「推進にあたっての基本的な留意事項」と訂正していただきたい。科学技術基本計画における様々な用語の使い分けに抵触しないための措置。資料2は十分更新が間に合わないままにお出しした。

資料3は目標を一言で示すための資料。研究目標の2番目の「把握空間」は私自身が考えた言葉であるが、人間が知覚することができる空間、たどり着ける・場合によっては居住する空間、理解・推測・解明する空間などを含めている。フロンティアテクノロジーが目指す目標は、この空間を革命的に拡大していくことという意味を込めてこの言葉を仮に使わせていただいている。この分野の重要性、分野の中で更に何処に重点を置いていくかの観点として、目標をキャッチフレーズ的に国民に示して行ければ、と言うことで資料3を用意した。

(馬場) 資料1の白丸()と黒丸()の意味に違いがあるのか？

(細見) 重点となるべき領域の部分は白丸で、黒丸は具体的事項ということである。備考欄の黒丸は特に意味はない。

(小平) 重点となるべき領域・項目の、最初の は無し、以下の は にしては？

(西尾) 資料1の分野状況について、極地の開発利用が入り得るのかを検討いただきたい。極地は産業的国際競争力への波及という意味ではまだまだであるが、極地は宇宙に開かれた窓であり、過去の歴史が凍結保存されていることは大きな利用価値がある。インフラも整いつつあり、人類の英知を持って協同で保存、管理し、人間の生存に関する情報の保存庫であるという意味でフロンティアであると考えます。

(石井) この分野を考える際、サイエンスとテクノロジーを考えており、極地はサイエンスに関する項の地球科学に含めている。極地は開発の対象とは当面ならないという理解で、サイエンスに含まれている。

(馬場) 極地は魅力的なテーマに聞こえるが、ここへ盛り込むようなものではないのではないか。地球科学に当然含まれている。具体的事項を入れていくと、あれもこれもということになる。

(石井) 資料2の文章に入れることで工夫していける。

(西田) 資料3の「地球・生命」に宇宙を加える必要がある。誕生に加えて進化も加えるべき。期限を付けるのは良くない。テクノロジーの面では、日本の技術発展の牽引者となるようなことを含めるべき。我が国の国際競争力という観点を入れるべき。関連して資料1の「重点となるべき領域・項目」では科学の割合が少なくなっている。人間の知的財産の拡大に資するという項目を追加したらどうか。あと「上記観点」は「下記観点」の間違いでは？あと日本としての観点と言う点をもっと鮮明すべき。

事務局注)「重点化の考え方」に書いてあることを、「重点となるべき領域・項目」で繰り返しました。

(石井) テクノロジーの牽引者の観点については、ここ(資料3)での目標は、以前米国が 年までに人間を月におくるという目標を出したようなものを打ち出したい。上からの要望でもある。この分野で具体的な到達目標を定められないかと考えている。

(西田) 米 NASA の設立目的文章には、「米の航空宇宙における優位性を確保する」とある。

(石井) ここで言う目標は、上記の目標とは意味が違う。ここに示したのは基本的な理念であり、到達すべき地点。例えば日本の科学技術の牽引車となる、というのは終わりのない目標。もう少し到達すべき目標を示したかった。

(西田) 資料3の2つの目標もエンドレスの課題のようなものであるので、もっと具体的な小さな目標にすべきではないか。

(石井) 改訂を繰り返すうちに理念的な方に移ってしまった。何年先かは別にして、実際に到

達すべき目標にもう一度引き戻して考えていただければ有り難い。

(河野) 革命的拡大を何年までというには定められないだろう。例えば周回軌道辺りがある範囲として何年まで、その次は何年迄というように具体的に定めた方がよい。

(石井) 把握には様々な次元があり、観察できるのと到達するのとでは把握の意味が違う。

(河野) 空間を距離的なもの以外に捉えられると言う趣旨では？

(石井) 抽象的になると收拾が付かなくなるし、かといって特定の分野の特定の事柄について具体的な目標を設定すると、他のことはどうなるという話になるので、何か包括的な話が出来ないかと考えていたのだが。

(植田) 資料3は資料1から遊離しないようにした方が、外から見てわかりやすい。資料1の「重点となるべき領域・項目」で国民が夢を抱けるようにということを考えると、産業という視点からの表現は入っているが、国民生活の向上に貢献する等、国民の役に立つという視点が必要。宇宙利用というものは、宇宙と地上を結びつける広がりが必要。ところが国民に直接役に立つとすると301条の問題もあり、これまでは断片的な衛星の搭載技術に国の開発が向けられてきた。国民に直接役に立つインフラや地上システムを含めた全体システムの方向に向かって欲しい。せめて備考にこの様なことが一行でも入らないか？

また技術安全保障ということは国民には不可解ではないか。安全保障としては駄目なのか？更に世界市場の開拓を目指すなら、高機能観測衛星より高機能通信衛星とするべきではないか？

(谷口) 資料1の分野の状況、「宇宙産業を・・・分岐点」とあるが、もう分岐点かを迷っている時ではないので、積極的に書くべき。技術安全保障は分かり難いので明快に書くべき。国際貢献の観点では、地上と宇宙を結んだシステムが必要。観測データのみを途上国に送るのではなく、地球観測・予知・予測データまでを送るべきである。日本が予知予測をしっかりとやることは基本で、そのための観測環境を整えて国際貢献に備えるべき。

(石井) データだけでなく、情報も送っていくことは想定している。

(田中) 資料1の分野の状況の海洋開発の部分についてであるが、世界最深の探査能力とするので限定的になるので、調査能力とした方がよい。水準の維持でなく、まだ不十分だと思っているので水準の向上とすべき。また技術安全保障では、海洋調査により海洋を含めた国土の安全を保障すべき、との観点を入れられないか？

(石井) 何に使われるかは別にして、技術の観点から安全の保障を図るという意味。安全保障とすると漠としてしまう。フロンティアの分野にとって大事なものは、この技術の観点から日本を守ろうと言う意図。

(田中) 海洋調査でデータを集めている近隣諸国がある。日本には対抗手段がない。その意味で安全保障を気にした。

(五代) 資料1の留意事項であるが、全てを官がやるべきものではなく、民間の力をかりるべきものもある。官民協力あるいは民間活力の利用といったものを含めてはどうか。また国民に役立つという部分は今後もどんどん出てくるだろうから、書き方は別として記すべき。

(馬場) 重点となるべき領域の部分で、科学面が明確に出てきていないが、日本の天文学等科学研究は世界的な貢献をしている。真理の探究はすぐには利益には結びつかないが、世界的な研究成果を出していることは、他の研究にも波及し、国民を元気づけることができる。国際科学プロジェクトに限定しているがそれでよいか。もう少し具体的に書くべきでは？

(平) 是非、科学面の振興を重点領域に加えるべき。海洋研究などは長期的な連続したデータが重要で、プロジェクト研究だけではないことを示す項目が欲しい。

(石井) 科学技術基本計画の「科学技術の戦略的重点化」においては、基礎研究の推進という項目が8分野とは別に記述されている。それに加えて、フロンティア分野において更に記述する必要がある場合、その必要性の根拠が明らかでなければならない。この状況は他の分野にも共通で、重点をおいて資金を投下すべき対象が何であるかが問題で、科学とは土俵が違う。

(河野) 技術開発ということは資金を出せばできるもの。国際競争力を高めるという意味では技術革新が必要なのでは？

(木下) 海洋という言葉を使うと、流水(つまり海水)のことしか頭に浮かばない。海底にある資源等も考えると、海洋を海域という言葉に置き換えたほうが良い。資料2で日本の調査能力は世界最深だけでなく、広域という特徴ももっている。安全保障の問題は海域においても依然として重要なものである。海洋資源という場合、水産資源とそれを含めた海域全体の資源もあるが、後者として捉えて欲しい。観測データもそのまま海外に提供するのではなく、日本の技術を合わせて輸出すべき。例えば環境保全と言ったことを考えると、広がりが大きく、一つの研究機関で出来ることではなく世界全体で取り組むこと。その中で日本が主導的に活躍すれば、国民を勇気づけることになる。

(石井) 観測技術や機器を海外に輸出するという意味か。

(木下) 環境問題には海洋の問題は重要で、例えば温暖化問題でも海の貯蔵能力を考えに入れないといけない。日本の技術力で海の貯蔵能力を生かした環境問題への対応を、世界に先駆けて提言していくべき。

(野中) 資料3では到達できる目標を出したいということであるが、国民が夢と期待をもてるということ考え、また同時に21世紀に何故フロンティアという単語が夢を与えるのかを考え

ると、具体性はないが何か良いことが出来そうかなと言う点にある。地球という生命共同体に向かって国際的貢献のリーダーシップを取るといふ何の具体性もない発信があっても良い。NASAの趣意書は東西冷戦期にあって、自分の国が一番になると言うことが求心力となった。21世紀を見据えて、国境がないフロンティアでは、自分の国が一番になると言うよりも、国際的なリーダーシップをとるとした方がよい。例えば「途上国への提供」とするのではなく、我が国の持つ技術で、知恵や情報を発信受信するベースとして、貢献したいというべき。しかし現在は情報発信をしてリーダーシップを取っていこうとする発信力のある知的な基地がない。科学であろうが、技術であろうが、知的な財産を統括していく機構にお金を流していくことが必要であると、分野の状況の一番最初に提案としてはどうか？

（石井） 第2期科学技術基本計画の策定の時にも言ったことであるが、米国が世界の警察である為に、米国のリーダーシップが国際社会に持つ意味は自明であるが、日本がリーダーシップを取ることがどのような意味かを外国の視点で見た場合、分からないのではないかと？日本のプレゼンスが何かと考えれば、非西洋の国の中で最初に近代化を行い、失敗と成功の両方を経験していることというのは、発展途上の国にとっては大きな意味を持つ。このことは総論として、わきまえておくべきポイントとして基本計画に入れた。以上のことは8分野に共通する。フロンティアの分野で、とりわけ日本がリーダーシップを持つことの意義を鮮明に打ち出せれば、書き込みたい。フロンティアに即して出なければ意味が薄い。

（毛利） フロンティアという概念を考える。米国はヨーロッパから移り住み、西部を開拓し、次に宇宙を開発した。この論法は日本には通用しないだろう。我が国の場合、国の外にでることがフロンティアではない。何を目指しているか共通認識が必要。21世紀に何故フロンティアなのかを考えると、地球全体の環境が生き延びる鍵となるから。西洋型の考えでは人間が中心であるが、我々は人間だけでなく地球全体を考える意識を持ってきた。地球全体で生命全体のことを考えるのがフロンティアのイメージと捉えれば、何かメッセージを発信できるのではないかと？

（石井） そのような意味で把握空間ということばを使った。米国が言っているから日本も言うのでなく、日本がこの分野で研究開発するということが、地球規模の世界にとって何の意味があるのかを日本独自のコンセプトとして言葉にしたい。

（野中） この目標を見た際、どんどん先へ進むだけというように感じた。先へ進んで行って、そこから地球をどう見るか、何故開発するのか、フロンティアに行く意味をメッセージの中に言葉として入れ込むことが、我々の使命ではないか。そのメッセージをまず冒頭に持ってくるべきではないか。地球にいいことをしたいと言って、そのために知的基地となる組織を作りましょうといった具体策が降りてくるのを紙にしては。

（毛利） 具体的には同じ作業でも、冒頭にあるだけで海外での説得力が全然違う。

（植田） 国際的な発信もあれば、国内での牽引の仕方の話もあるので、折角宇宙と海洋とをただ並べたのではなくフロンティアという名前を付けた以上、その理念を最初に示してはどうか。フ

ロンティアには先端的な面だけでなく、安全保障の問題もあり、国民の生活にも関与し、というように日本のことが理念として全部入った上で、国際的なことに役立てていきたいとするのが良いと考える。資料1には資料3の理念を盛り込むべき。

(石井) 研究目標として掲げた意図とは、異なる話。青臭い議論も必ず必要ではあるが、一方で多額の税金を使う以上、分かりやすい目標も掲げておく、いわばバラ色の議論もする必要がある。資料1を集めて、当面は6月の概算要求に何をメッセージとして示していくかの議論を行う。したがって青臭い議論と予算分捕り合戦のための議論の両面で進めていただきたい。

(毛利) 予算の分捕り合戦にしても、青臭い議論とバラ色の議論を分けるのではなく、常に青臭い議論に通じることを認識すればよいのではないか。

(木下) 資料1の一番下と資料2のp7。米国では人材が優れており、海洋関係者が宇宙のことを良く知っているなど分野間の連携がとれていて教育の水準が高い。これは人材の問題。例えば宇宙開発事業団はハードウェアの製作には邁進してきたが、ユーザーや、如何なる科学がなされるのか、国民に如何なる還元があるのかなどについて議論の場を設けようとしても、人材も資金も集まらない。議論の場が立ち消えになる場合が散見される。海洋関係でも、人を確保しておく機関・組織がないので、いつの間にか散逸してしまう。この問題をまず青臭い議論をやる為の土台として、日本の国策として論じて欲しい。

(桑原) 現実的な問題と夢の問題の双方が存在しているため難しい面がある。日本が国を挙げて宇宙全般において先端に行くと言うことは不可能であることは共通認識と考える。宇宙というものは共通の世界のものであるため、日本も一員として、国際協力という視点も必要であり、宇宙開発委員会でも、子供に夢を与えるということや、有人まで進むかと言うことも含めて議論がなされ、その様な視点の発信をしたはず。では我々の役割は、宇宙開発委員会と同じ議論をするのでは意義がない。宇宙開発委員会側では開発のみが取り上げられているが、応用という視点が重要。全体を見ながらまとめないとこの会合の意味合いが薄れる。

(小平) 日本は歴史的には空間的に北方や南洋にも進出している所以、米国の場合と同じ感覚でフロンティアを捉えてもよいのではないか。現在のフロンティアが人類共通のものであることがこの分野を特殊で重要としている。地球全体の資源・環境・防災・各国の安全保障と言った問題が共通空間に含まれるため、本質的には空間の取り合い。この空間をどう征するかが安全保障や、国際貢献におけるリーダーシップにつながる。科学技術の進展が空間を征することを可能としており、日本が一線に立てるか立てないかの瀬戸際。国民に夢と希望を持たせる、つまり知的財産や経済的恩恵をもたらすというアピールと同時に、日本が厳しい状態にあり、立ち止まってはいけないということを国民に認識してもらえ文章が、冒頭にあっても良いのではないか。アメリカ主導の市場経済がグローバル化していることが根底にあるということも前提にしなければならない。

(石井) 「国民が夢と期待を抱ける」と言う文章は「プロジェクト」にかかる。プロジェクト

の選定理由としてある。

(五代) 宇宙開発委員会では様々な議論がまとめられて中長期戦略となったが、問題はリソースが無いことで、全ての議論が圧縮されてしまった。総合科学技術会議は日本全体を考える場と捉える。確かに宇宙開発事業団が関係する予算は 98%を占めるが、きちんと形としてではない。国全体としての方針を発信するのは総合科学技術会議であると期待している。宇宙利用は考えとしては重視されているが、リソースがないために実際には重視されていない。

(石井) リソースが限られている現実内で、どのように適切に配分するかのクライテリアを考えていただきたい。

(桑原) NASDA がやろうとしていることはかなり絞られているので、どれだけをサポートできるかという議論がひとつと、もう一つは NASDA で取り組まれていない宇宙活用についてはここで検討して予算に反映される処まで持っていかないと実現しない。毎年の予算に反映されないのであれば、20・30 年先を論じて何も変わらない。もっと絞られる可能性もある。具体的なイメージを持って検討することも重要。

(野中) 国家予算資源配分は、各省庁の積み上げがベースである。日本として重点目標を定めていくためには、従来各省・各機関個別に住み分けて投入してきた予算を、全て総合科学技術会議に一度集めて配分するくらいの権限が無いくらいの出来ないと思う。それなくして、具体的に国際貢献のために直近の来年予算から動かそうとしても、気分の上でやったような気になるだけ。これまでは、資源配分の優先度にはクライテリアがあり、各省毎の力関係で決まってきた。統括して国策としてやるなら、これを断ち切ることが必要。

(桑原) 我々はそれを目指している。縦割り排除はなかなか難しい面があるが、諦めるわけではなく、総理大臣に向けて大いに発信していきたい。ただ現実を見ると制約も理解していただいて、何処を重点化するかを大いに議論していただきたい。

(野中) ここで重点化に関する文言を作っても、これまで長く別な言語・評価体系でやってきた各省に、その部分だけ持ち帰らせてやらせるのは非道いのではないか

(桑原) 各省の動きを確認しつつ、修正意見を出来るようにしたいと思っているが、難しいとは思ふ。予算がここに降りることは最善だが、もっと難しいと考える。

(野中) 総理に対して球を打って行くべき。

(井村) 野中氏がおっしゃったことは我々の大きな悩みである。過去 17 兆円の投資も、色々集めた結果の話。同じやり方では又ちぐはぐな結果にはなるかとは思ふが、我々の思うやり方ではなかなか到達できない。次年度が近づく中で何が出来るか考えれば、この部分については重要なので、これについては重点的に予算を配分してもらいながら、結果として科学技術予算を増や

していくというアプローチしか今はできない。

科学技術基本計画においては、研究者には一定の資源を与えて、口出しをしないでブレークスルーを引き出すという方針が一つある。もう一方で、産業界等からの要請に応え、高齢化社会への対応等をしなければならないという側面があり、ここでは重点化をすることに決まっている。重点化においては、それぞれのプロジェクトが重要であると言っているのは重点化にならない。この中でも本当に大事なプロジェクトは何かを議論していただきたい。ある分野への集中は先進諸国のいずれもが行っている。

もう一点、現内閣の方針として財政再建があり、多額の研究開発予算を投入しているエネルギーと宇宙は見直しの対象となりえる。その中でも日本の将来のために守るべきもの、伸ばすべきものを出来るだけ絞り込んでいただきたい。

(馬場) 科学技術の分野の中で軽重を付けるという話であったが、国全体として21世紀をどう考えるかという視点で、科学技術創造立国を国是として立てているのであれば、科学技術への投資は重要であるという主張が必要。

(井村) 科学技術予算は未来への先行投資であるから、これをやめると将来がない。しかし、科学技術予算の中でも非効率なものはやめるという判断が必要。

(小平) 資料1の備考で、財政関係に触れるならもっと前向きな表現にならないか。また人材の育成と保持およびデータのシームレス化についても、重要な点として、備考に入れる以上に記述して欲しい。

(石井) 備考欄も元々の書式にはなかった。

日本はやはりフロンティアの分野では日本はイチロータイプでやっていくのがよいのではないか。超花形ではないが勝利に貢献し、効率も非常によい。イチロータイプになるにはどうすればよいか。問題はイチローと違って日本の進み方は手足がバラバラに動いている状態であること。17兆円ですら本当に科学技術に使われたものかは分からない。今後も我田引水で行われる懸念があるが、これではイチローにはなれない。勿論手足の統率以外にも、読み・選球眼・スイングが良くないとヒットは打てない。それがこの場の仕事。

以下、資料1については書式に制限はあるが御意見があれば、また23日に親委員会で強調すべきこと、本会議で強調すべきこと等あれば御議論いただきたい。

(馬場) 資料1の備考についてであるが、財政圧迫の主因が科学技術経費ではないだろうから記述は不要。例えば資料2のp5で地球シミュレータにおける世界最速コンピューターの開発等、また人材育成やデータのシームレス化などはフロンティア分野の波及効果のよい例であるので、これらについても特筆すべき。

(石井) ここで述べられていることは他の分野と非常に密接に結びつき、単に切り方が違うだけかも知れない。実のところ8分野は多すぎて重点化にならないとのメッセージも来ており、このような状況下でどうやってフロンティア分野の大事なものを推進していくかという観点でお知恵

を頂きたい。

(馬場) 資料3は、スローガンとして打ち出そうとしているのか、それとも各論にかかっている目標を拾い出したものなのか?意図が不明確。

(細見) 今後数値目標等を考えていくことになるが、今は情報化社会だが、長期的に産業と技術革新を起こすのであれば、次にどんな社会がくるのだろうかを議論していただければ、多少とも立体的な文言を推進戦略に書き入れられるのではないかと考えた。国民に近づいたメッセージにしないと理解していただけないことを念頭とする議論を頂きたい。

(野中) 国民に向けたバラ色のメッセージとしては、見えるものを挙げることよりも、地球のためになるリーダーシップを取るというメッセージがふさわしいのではないか?アメリカの月へ行くというメッセージやNASAの趣意書のようなメッセージを、21世紀に日本が示すとすれば、我が国が一番にと言うことではなく、地球のためになるリーダーシップを取るという、細かく示した具体目標だけでなく抽象的な目標もバラ色のメッセージ足り得る。

(石井) バラ色のメッセージも送信先が永田町と国民と二つある。

(馬場) 数値目標を出すとか、スローガンを示すことは国民のために必要なものであり、科学技術ナショナリズムをくすぐる。これは悪いことではない。日本人の資質を自覚するということから、国民的な、あるいは世界に先駆ける目標やスローガンを明確に国民と共有していくことは重要。フロンティア分野は打ってつけ。たたき台の内容には魅力を感じるが、どのようにして出していくか。

(井村) このようなスローガンは必要であるが、総合科学技術会議がまとめた報告に入るかは別問題。発信先は二つあり、例えば全体予算を増やすには経済財政諮問会議の支援が必要で、分かりやすい言葉でスローガンを発信していくことが重要。良いスローガンを是非提案していただき、どのように利用するかは総合科学技術会議にお任せいただきたい。

(植田) 資料2のp8で国民意識を高揚させることが重要であるが、まずは開発関係者に、国のため、国民のためという意識を持たせないと、国民にいくら説明しても分かってもらえない。関係者の意識変革から始めるべき。

(河野) 資料2のp10等で、「輸送系の低コスト化・高信頼性の樹立」とあるが、現在盛んに行われている次世代輸送手段の基礎研究の展開が議論の対象とならない様感じる。「低コスト化・高信頼性等運用性能の革新」という記述にすれば、国際競争力強化にもつながる。

またp6の「宇宙利用をささえるため」と言う部分で、宇宙環境つまりデブリの問題は深刻化しており、排除するための研究が日本で進んでいて日本が国際貢献できる分野であると考えるので、「宇宙利用をささえるため、宇宙環境・安全性の確保と共に、」としていただきたい。

(石井) 競争力というと低コスト化が入っている。その中には再利用等も含まれると理解しているが。

(有本) 第2期科学技術基本計画では「社会のための社会の中の科学技術」がキーワードになっている。例えば、宇宙専門家のための宇宙開発ではなく、社会のための社会の中の宇宙開発という姿勢を念頭においていただきたい。

(野中) 全く反対の考えもあると考える。これまで通りの監督官庁と予算配分にプライオリティを付けるやる方では駄目だということを前面に出した方が、社会のためになるようにと要請するよりも、(社会のための)ある目標に関する最良の資源配分の仕方にたどり着けるのではないか？

(有本) もう一つ、縦割りを排するという理念もある。ある国家目的に対して、各省の持つ資源全体を動員するように研究開発のシステムのあり方、マネジメントの仕方等も変える必要がある。他の分野では多くの機関があり、統合化するための中核となる機構が必要とされていて、総合科学技術会議でそういうことをすべきとの議論になっている。

(植田) 基本計画には確かに書いてあるが、単なるお題目にならぬように、このような戦略の中に「社会のため、社会の中」という理念を開発関係者の目に見える形で盛り込むことが必要である。

(馬場) この場が専門業界の代表者の談合の場と思われてはいけない。社会の中の科学技術ということは、国のための宇宙開発、社会のため宇宙開発、世界のための宇宙開発ということであろう。このような視点は重要で、常に持ちながら論議する必要がある。

(野中) 経済産業大臣は、競争力は競争の中から生まれるといている。フロンティア分野において、競争力を生まない仕組みがあるか、洗い直してはどうか？それぞれの分野で構造改革に何が出来るか、何が阻害しているのかを総理大臣に向けて発信してはどうか。

(石井) 本日の会合はこれまで。

(事務局) 次回は6月7日の15:00~17:00。本日と同じ委員会室を予定。

(石井) 議事録に関しては、御意見を頂きたい。

(五代) 専門調査会等の動きは知らせてもらえるのか？

(石井) 次回の会合の冒頭に報告する。各位からの個別意見は mailing list に流していただき共通の情報は会合で出したい。親委員会に向けては、資料1の一枚紙と、各分野からの一枚紙を更に一枚にまとめたものを出す予定。

